

は塩害の爲 灌漑用水の供給源がなく、農民はあらゆる応急対策を講じて96%程度植付を完了した。この辺一帯は早場米地帯であるが、神栖村では1200町歩中約460町歩が塩害に出合っている。被害を最少にいとめようとする農民村役場の懸命の努力の結果次の様な対策を講じた。

○ビニールパイプによる度河送水施設

○浅井戸施設

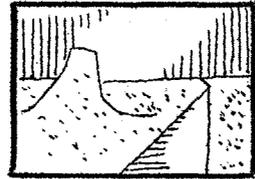
○追番作対策等

(Ⅲ)対策

応急対策——小貝川水路の掘さく、上流ダムの放流、上流の水利制限、ポンプ揚水。

恒久対策——常陸川下流の節切工事、現在不完全の水門の閉門化、本流の潮止工事、等があげられる。
(岡久美子)

巡 検 記



昇仙峡、身延、沼津

この巡検に行ったのも、やがて一年近くになるので、こまかいことは忘れてしまった。それで、今でも印象に残っていること、感想などを簡単に述べてみたいと思う。

私が地理科に送んだネーの条件は、地理科を巡検があるからだ、と云ってもよい。それくらい旅行を楽しみにしていた。又、巡検は地理の学習の一つだとは云っても多分に遊覧的になるのではないかと思っていた。幸が不幸かこの予想はいささかあてがはずれた。その様子を次にお知らせする。

これは赤木先生の地質学の巡検だ。最大の見学箇所は昇仙峡だけだ。途中地質学的、地形的に価値ある所は実地に見た。岩石はいろいろとあって憶えられなかったが、はつきりのみこんだことは、ストライク、ドイツ語がいかなるものか。またそれらの測り方である。これらは教室では教わっていたものの、もうそれらが私の頭のごどこにあるかあやしいものだった。又、断層も見た。なんだ、こんなのだったら度々見てたのになおと思つて、今までの自分の学の黒さを取じた。

あの名からして天に昇るような昇仙峡、その岩も学術的には方状節理とい

うものだという事がわかった。この昇仙峡はもつとくわしく研究したかったが時間的に余裕がなかった。

暑さに悩まされた甲府金地の夜。しかし、私達十四名が赤木先生の娘としてこの宿に安く泊ったのを初めとして、激訓やお菓子を戴いた「楽しい」夜だった。

同じ調子で身延、沼津を巡った。昼間は、地図を片手に、クリノメーターとハンマーをバックに、汗を流し歩き、夜は勉強、そして蚊や熱さに悩まされる。こういうと、すごく探検心の強い学徒の研究旅行のようだが、そのかげには、夜な夜な、いかにも乙女らしい話に又はトランプに際の過ぎるのを忘れ、乗物の中では、歌い、かつ食べるといふ努力がかくされている。

長 静

長静へは小学生なんかがよく遠足に行くのだそうである。東武東上線を乗り切って秩父鉄道に乗り換える、約二時間半である。そんな所に私たちは二日ばかりでゆくのだから大層のんびりしたものである。行って見れば大して美しくもない普通の河原であった。

見どころは荒川岸の石である。直径一メートルをこす大罅穴、一面にのびている小断層とそり立つ蛇紋岩の絶壁、それに所々に姿を見せる大断層、村道の傍の不整合線等々、狭い中に、まるで中学校の教科書の杯にいろんなものを見ることができて驚いてしまった。

この辺の岩石は殆んどが結晶片岩である。黒く上品に輝くのが黒雲母片岩、紅と白とが鮮やかに縞をなしているのは紅縞片岩と石英片岩の互層、足下の層がかつたのが赤泥片岩。どれもよく見ればなかなか美しかった。面白いのは虎石といわれる褐色と白色との縞になった。ちょうど虎の背中のように見える巨大な岩である。雲母片岩と石英片岩との互層であるとか。

巡検のオーの楽しみはどうも岩を見ることより、夜である。この夜は、先生方を囲んでわあわあ騒ぎ、笑い疲れた頃先生のお部屋から引き上げる。そのついでに、赤木先生に余興をさせていただくのに成功したのも長静での幸だった。私たちの部屋に帰ってもまだ騒ぎは続く、これからが本番である。あちこちにおいしそうなお菓子の山を作り、それをもとに話し合いが始る。経済論から政治批判、人生観から恋愛論まで現れる。はては、トランプで人生を占い、身の上相談にまで発展する。翌日また歩かねばならぬことなどさらりと忘れて、疲れ果てるまで鏡き、部屋が、皆の静かな寝息に包まれるのは

うものだという事がわかった。この昇仙峡はもつとくわしく研究したかったが時間的に余裕がなかった。

暑さに悩まされた甲府金地の夜。しかし、私達十四名が赤木先生の娘としてこの宿に安く泊ったのを初めとして、激訓やお菓子を戴いた「楽しい」夜だった。

同じ調子で身延、沼津を巡った。昼間は、地図を片手に、クリノメーターとハンマーをバックに、汗を流し歩き、夜は勉強、そして蚊や熱さに悩まされる。こういうと、すごく探検心の強い学徒の研究旅行のようだが、そのかげには、夜な夜な、いかにも乙女らしい話に又はトランプに際の過ぎるのを忘れ、乗物の中では、歌い、かつ食するという努力がかけられている。

長 静

長静へは小学生なんかがよく遠足に行くのだそうである。東武東上線を乗り切って秩父鉄道に乗り換える、約二時間半である。そんな所に私たちは二日ばかりでゆくのだから大層のんびりしたものである。行って見れば大して美しくもない普通の河原であった。

見どころは荒川岸の石である。直径一メートルをこす大鍋穴、一面にのびている小断層とそり立つ蛇紋岩の絶壁、それに所々に姿を見せる大断層、村道の傍の不整合線等々、狭い中に、まるで中学校の教科書の杯にいろんなものを見ることができて驚いてしまった。

この辺の岩石は殆んどが結晶片岩である。黒く上品に輝くのが黒雲母片岩、紅と白とが鮮やかに縞をなしているのは紅縞片岩と石英片岩の互層、足下の露がかったのが赤泥片岩。どれもよく見ればなかなか美しかった。面白いのは虎石といわれる褐色と白色との縞になった。ちょうど虎の背中のように見える巨大な岩である。雲母片岩と石英片岩との互層であるとか。

巡検のオーの楽しみはどうも岩を見ることより、夜である。この夜は、先生方を囲んでわあわあ騒ぎ、笑い疲れた頃先生のお部屋から引き上げる。そのついでに、赤木先生に余興をさせていただくのに成功したのも長静での幸だった。私たちの部屋に戻ってもまだ騒ぎは続く、これからが本番である。あちこちにおいしそうなお菓子の山を作り、それをもとに話し合いが始まる。経済論から政治批判、人生観から恋愛論まで現れる。はては、トランプで人生を占い、身の上相談にまで発展する。翌日また歩かねばならぬことなどさらりと忘れて、疲れ果てるまで鏡き、部屋が、皆の静かな寝息に包まれるのは

夜明け近くであつた。こうして、日頃の考えを自由に話し合えるのはよいことである。耳に二回にしても音がとろつてこういう時を待てるのは私達の大きな幸せである。

東北地方

7月3日より一寸前、即ち2日23時40分、いとも静々と上野発、珍しいことだ？だつてまだオ一日目だから。それに熊先生の手前、一寸遠慮したというわけ。(これは全く要らぬ遠慮であつた。)でも采れた争に一晚中我々の虫声は先生のお耳に響していたという事だつた。オ一日目といえはまだ元氣ぴんぴんの状態故殆んど徹夜で目を開けていたのは勿論の事、窓外ほのぼのと白む頂群山着、こゝで二人のお嬢さん、ホームに飛び出してスルスルスリといとも美味しそうにおそばをかき込んだ(立って!)発車のベルが鳴ると同時に食べ、呑み込み終るとは御二方なかなか熟練したもの。車中熊先生はバタヒーナツツを廻して下さつたが私達はまだはじめての事とて加減していたゞき、鉄砲玉のお使いにはしなかつた。さてこれから次々に皆、就中先生の叱けの反ははがれてゆく。

3日7時01分猪苗代着、バスに40分ばかり揺られて磐梯園入口へ。アラアラリと歩きながら郭公の「テツペンハゲタカ」の真似などして実のどかなもの。熊先生のオミアシにひつかつて水たまりに落ちそうになつた犠牲者も出る。先生ったら全く虫断ができない!五色沼を巡り松原湖畔に出ると、愛らしい子鹿の出迎えを受ける。「アンレヨー、ソナニフザケルデネー」とは熊狭いの邊さまのことは、こゝで老若二派に分れ、自称若人組は罅裂火口を目指して猛進、先頭はなんと若人ならぬ熊先生にとられる。邊さん組は一足先に猪苗代湖畔の宿に辿り着き、邊さんなどしながらくつろいでいたらしい。片や登山隊、太馬こそ見えないが時は7月、登るに従つて身体中がほてつて来て、少しは休みをやらせて隊長の御背中を眺みつけても効果なし。終始疲らぬ歩調とスタイルは脚がの乱れも見せまい、自ら踵んで若人組に入った事を後悔し始めた頃、眼下に松原湖の青さの広がる中腹で休憩、暑い!皆は顔面紅潮、先生は兎くまで背広をお脱ぎ遊ばさないのだから驚異的であつた。が兎も角若人組の名折れになつてはと腰をあげ、隊長に従つて罅裂火口に到着、此処は私達にとって絶好の見晴らし台と給油所の救をした。即ち今では大小の石ころがごろごろしている且ての火口を一わたり見渡し終ると一同は早速パクツキにかつたのである。食足りて一休み、てんでに入

ケツナをしたり写真を撮ったりして下山。金子さんは命から二番目に大切なハンマーを忘れ、途中から敢然として引返す。お蔭で残りの私達は、その向道端の草叢に寝ころんで山の空気をほしいまゝにする事ができた。さて再び下山行進を續けて桧原湖畔に帰る。暮さま祖の殺を追って精苗代湖畔の宿へ急ぐ。翁島駅から宿までの間は、山登りの行進とは趣を異にし、アラリスラリとぐみの実などをつまみ乍ら歩く。序乍らぐみの実に真光に目、舌口をつけたのは熊先生であつた。少しく道に迷つたりして目指す宿へ辿り着く。翁島駅で別れて精苗代湖へボートを漕ぎに行つた人達を迎え、昏が揃つたのは夏の間も沈み、湖から吹き寄せる風が崩け放たれた窓から心地良く入る夕暮であつた。この日は疲れていたせいか、食事を入浴を済ますと昏溫和しく(比較的)床に就いてしまつた。

4日午時39分翁島発。さして好天ではないが一夜の熟睡で昨日の疲れもすっかりとれ、軽やかな気分で郡山を離れ、福島に向う。福島着//時39分。この間の車中は熊先生発せられる所の珍奇な謎々等に首をひねっている中に過してしまつた。福島では一向、先生よりアイスコーヒの御馳走に手つて恐縮する。さて正午も43分を廻り米沢行の列車に乗るや、宿のおはさん心尽しのお弁当を用いてみて驚いた。のり巻おにぎりのスケールが実に大きいのである。スマートな熊先生及びお上品な地理科諸嬢にあつては、その処理に甚だ困難を感じた事であつた。米沢では米沢市立図書館見学。この図書館は上杉鷹山の資料を豊富に蔵しているとかで、バスの時間に縛られている私達がやるべきする程沢山の厂史的資料を並べられ、館長自ら説明に及んで下さつた。珍しい文献の数々に夏分の未練を現し乍ら約ノ時間位で切り上げ、バスでこの日の宿白布高湯に向う。東北の初夏の緑美しい田舎道を走るバスは実にのどか、しかも馬車優先の一本道で私達のバスはしばしば馬殿のお通りの為にかえの露地へ特避しなければならなかつた。たまたまそこが馬小屋の前だつたりすると、長い馬届の時ならぬ窓からの御挨拶に爆笑が湧き起つた。そうこうし乍ら温泉に到着したのは夕方もう時近く、珍しい田舎の湯に降り乍ら、途中の車中で先生より出された謎々の宿題を懸命になつて解いたが、結局これは私達の完敗であつた。蓋し私達がノーマルであり過ぎたのである。この日に至つて昏、特に先生の化の皮はすっかり剥れてしまい、悪戯の応酬戦に私達は可成頭を使う必要があつた。しかし私達のしかけたわ本に先生がどの程度かゝつて下さつたのかは、先生根特のポーカーフフェイスからは知る術も無かつた。

5日。昨日とは打つて変つた好天に早くも真夏のきざしが見えて、朝から

ファイトが黒くなりとうだ。バスを待つ間に側に来た紳士が尋ねて曰く、「今日はどこに登るんですか？」私達が平地に行くのだと云うのに、「どこでは昨日登ったんですね」と飽くまで登山に拘泥する積りらしい。その時は何気なく忘れたもの、私達の巡検スタイルを見ては平地を旅するレディー達と考える事が出まなかつたのだろうと、後になって皆ひがんだり微然色めきたったり……。東京出立以来色々先生にひっかけられていた私達。今日こそは、と美しき友情のチームワークで首尾良く激突する師の背面に旅館のマークを縫いつけた。こんな事をしていて聖徳太子ならぬ身の悲しさ。車窓見学の方は不本意下らお留守にまらざるを得ない。米沢-赤湯向の短かつたこと、乗つたと思う間もなく（即ち眠つたと思う間もなく）「アカユー、アカユー」と呼び起され、又もや灼熱の太陽の下に放り出された。白竜湖附近の谷地田、赤湯のぶどう園を見学。ザリザリと真上から照りつけられて、パラソルならぬ雨傘（怪しからぬ生徒は地図）で日焼けを防ごうと、いじらしい心がけのお嬢さん達は皆フワフワあえいでいるのに、背中に身を正された我等が指導教官熊先生は、お背中の旅館マークも鮮やかに、歩調も乱さず行進なさる。そろそろ腹時計が何かを訴え始め街道際の店が気になり始める頃、やつとお休みのお許しが出る。皆一せいで「火の車井」という身につまされる様なものを注文したが、今は出まないと。折角一つ物販りになろうとしたのに……。兎に角昼食と休憩で元気百倍。少し早目に赤湯から山形まで直行。山形駅前にて一応熊先生にお別れし、夕食後サクランボウなど携えてお宿を訪問。夜の市内「見学」で巡検の日程は終りを告げ、これからは仙台より直接東京に帰るもの。男鹿半島、十和田湖に廻るものなど、茂つかのグループに別れる事になる。

那 須

33. 10. 9 ~ 12

松井先生、段海先生、学生6名

〔9日〕 朝8時40分上野を発ち、西那須野駅で数日前から来ておられた松井先生と落ち合い、那須農業高校へ。地学クラブの指導をなさっている梶橋先生に那須の地質を伺つた後、農場へ行く。畑の灌漑水を導る井戸が掘られていたが、旧河道と考えられる僅かな凹みを示す所に掘つた筈。砂礫の堆積が厚く豊富な地下水を得ることが出来るとうだ。近くの露頭でこの付近の基盤である大田原浮石層、その上のローム層、腐植層を見る。大田原浮石層は地下水の賦存状態と密接な関係を持つとのこと。バスでかなり大きな城下町

大田原に着き上州屋に泊る。

(10日)大田原からよく程南の実取へ。男体、高原等の美しい山々を眺めながら朝の気持の良い田舎道を行く。農業改良普及委員のお宅でこの付近の農業についてお話を伺う。こゝは大部分が水田で畑は自給用位。水田の灌漑は湧水が主であるが、近年西那須野方面で圃田が進み地下水利用が急激に増した為か、湧水期が以前は4月中旬だったのが5月中旬にずれてしまったので補給水として電気揚水をしている。裏作は従来僅かしか行われていなかったが、機械化が進むにつれ労働力の問題が解消されつつあり、大麦、ビール麦等が裏作物として普及している。そして今後の問題としては、灌排水設備の改良、水田の容土、裏作の普及等があげられるとのこと。

次は茂海先生の講説明を伺いながらいろいろの地形面を見る。大田原付近には古い丘陵の権現山面、旧扇状地の金丸原面、扇状地の大部分を占める那須野面、それを圃田した親扇面、蛭田面等各種の地形面がある。蛇尾川左岸にごく新しい12.3mの切通しがあり、浮石層やスコリアの層を含む厚いローム層が見えた。付近の水田には電気揚水のポンプ小屋がいくつも点在している。帰る道々松井先生から絶対効果があるという美容食の名講義を拝聴する。旅館から少し離れた大田原城趾に着いた頃は皆すっかり疲れてしまいゆつくり休憩して美しい夕方の景色を楽しむ。夕食後疲れも忘れて11時頃までランプに興じ、いざ今日のまとめをするとなると昼間の疲れが急にでて、今にもつぶってしまいどうな目をしょぼつかせどうにかまとめたのは1時。床に入ったとたん眠りにおちた。

(11日)黒城地区農業改良普及所へ。この地区は元来たばかりの地域であったが最近では圃田が進行している。たゞこは農家の重要な換金作物であるが労働力を非常に要することが問題である。現金収入、労働力、安定性等からこの地区ではたゞこと水田と略麦の三つをいかに組合せるかが、今後の問題点として残されているという。普及所を出てから、近くの比高20m位の丘にのぼる。広い那須扇状地をいゝ気持で眺めていると先生が「こゝから見える景観を10分間でまとめなさい」といわれる。慌てて乏しい観察眼で地形、土地利用、集落などがどうなっているかを見る。先生に注意されない。たゞぼんやりと眺めていて、色々のことを見落してしまっている様だ。帰途先生は方向オンチぶりを度々発揮なさる。何しろ上級生から「松井先生がいらつしゃる反対の道を行けば間違いない」と確忠告を受けているほどだから一

(12日)昨日大半が帰京してしまい、松井先生と学生二名。この日は西那須野方面の圃田状況を調査の予定。農業高校の地学クラブの生徒さんが忍籠

する我々を自転車の後にのせて下さり、梶橋先生と御一緒になる。この地域の近年の用田は殆ど地下水の電気揚水によっているが、その井戸は豊富な地下水を得られるものでなくては稲水期に大きな被害を受ける。扇状地礫層下の基盤の凹部、つまり地下谷の所には伏流水が流れていると思われるが、電探によってそれを探してあるとまさしく例外なく豊富な地下水が得られるという。農家での聴取は時々先生がよい質問をして下さるが慣れない我々は準備不足でなかなかまた争を聞くことが出来ない。最近の用田の動向は、水稻が安定性大で有利なこと、従来おなり行われていた養蚕が近年不振なこと等の株である。こゝが大規模に用田されたのはごく最近で、昭和30年から土地改良事業として収用で行い、7割用田が目標であるがもう殆ど達成しているとのこと。

今回の巡検では用田の問題を中心にみて来たが、扇状地までも進行して来た用田は、那須の農業に従来とかなり異つた性格を与えていることを感じた。

2年巡検

- 紀伊半島
- 甲府、上野原

